

St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学:そのあゆみ(その2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, アヤ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/125

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



聖路加看護大学—その歩み—（その2）

前田アヤ

紀要第5号に聖路加看護大学の生立ちの模様を述べました。この度はこれに引き続いてその変遷のあゆみを書くことになっておりました。

しかし、聖路加看護大学が認可されてから昭和53年には15周年を迎えました。本年になってから15周年を記念することはいささか時期おくれの感じがします。感ずるだけでなく事実出おくれであります。そこで、大学の歴史を語る資料となるものを転載させて頂きましてあゆみの変遷といたします。聖路加国際病院付属高等看護婦学校の設立から本年は61周になります。大学の発展に協力された方々がその時機時機に話されたり、書かれたものは、大学の歩いてきた道を知る上で大事な参考となると存じましたので、年代を追う大学の歴史は次回に発表させていただくことにしました。資料は次のようになっております。

1. 聖路加国際メディカルセンターの標語
2. 聖路加国際メディカルセンター
3. 聖路加女子専門学校第15周年
4. 病院を去るに臨んで
5. Commencement address
6. 聖路加病院看護大学設立について
7. 新しい看護教育を目指して

1. 聖路加国際メディカルセンターの標語

聖路加国際病院の標語である。看護教育の信念でもある。

TRUSTS
INTERNATIONAL
MEDICAL CENTER
TO THE GLORY OF GOD
AND THE SERVICE
OF HUMANITY

ESTABLISHED IN 1904

神の榮光と
人の福祉の
爲之を献く

2. 聖路加国際メディカルセンター

聖路加看護大学の前身である聖路加女子専門学校創立者 Dr.アール・ビー・トイスラー (R.B. Teusler) は昭和7年頃に同窓会誌に次の文を寄稿されました。聖路加女子専門学校創立後5年頃のものであります。

疾病に対する戦場

アール・ビー・トイスラー

医師、看護婦、事務員其他の勤務者を抱擁せる我が聖路加の一大家族は、我等が「メデカル・センター」なる名称を用ゆる意義に就て明確なる理解を有しなければならぬ。

近年まで、孰れの国に於ても、疾病に対する戦闘は、既に病気に罹った人々を治療するという努力にのみ限られて居た。而して臨床的看護及び専門的処置が、世界一般に長い間医療事業の中心を成して居ったのである。然るに幸にも現今に於ては疾病するという此の小範囲に止まる努力は、より広大なる領域の人類奉仕に取って代はらるるに到った。即ち今日では、中心を成す戦闘は、疾病を予防することであり、能う限り疾病を根絶せしめんとすることである。故に単なる病院設置という如き観念は、単に病床に於てのみでなく、家庭、学校、更に東京の如き大都市に於ては、公衆の集会所及び工業中心地等に於て疾病と戦う為めに、あらゆる形態の設備及人員の配置とを有する数多くの建物の統制ある一大集団という新らしき観念に道を譲らなければならぬに至ったのである。

故に近代の「メデカル・センター」は、「疾病に対する戦場」と称せられなければならぬのである。例えばこの聖路加に於ては、15年以前の病院及外来患者診療から、下記の如き進展を示したのである。

1. 看護という専門的職業を若き婦人に習熟せしむる近代的専門学校。
2. 公衆保健部。これは単に京橋区のみならず、東京全市の各方面に於ても著しき効果を収めつつあるものである。

3. 各方面からの患者の生活状態、財政状態を調査し、出来るだけ其の負担を軽減すること、並に吾人の能う限りの方法を以て、患者を助くる為の最善の努力を示すための調査部。

4. 助力と慰藉とを求めて聖路加に来る所の患者各個に就て、其の病的機制を明確ならしむる為に必要なる早期診断及正確なる発見を、疾病との闘争に於ける最も重要なる事として其の生涯を捧ぐる所の習熟せる多数の医師。

此等の四部門には、更に我等が発展の当初の基礎たりし薬局及病舎に於ける入院及外来患者に対する管理を加えなければならぬ。かくて我等は人間の疾病に対して戦うべき5つの部門を有する。而して是等の各部分は、各々其の特殊の立場を保ちつつ互に緊密なる連絡接近を図ることによって、始めて現代の「メデカル・センター」としての我儕の活動を語る権利を有するのである。

機会の到来する毎に、是等の活動は増大するであらう。さうして政府か、或は市か、又は外国の友人かによって資金が醸出せられ、最も進歩せる公衆保健法を、医者に習熟せしむる所の、全然近代的なる有資格者のホスト・グラジュエート・スクール 研 学 所 が東京に建設さるるに到るであらう。此の研学科を効果的ならしむる為めには、東京及農村に於て、一定の人口の集団を有するを要する。此処で医師及看護婦は、疾病への戦闘に於ける此の重要なる仕事の適当なる実地訓練を積むのである。

聖路加の職員は、此の拡大された人類救護の概念に於て各自の部署を受持つに適するやう、其の最善を尽すを要するのである。

次の会報が印刷さるる以前に、我儕は多分新しい病舎及新しい女子専門学校に移っているであろう。看護婦諸姉が、此の新ホームの完成を俟つ数年の間、窮屈な場所で、辛棒強く、咬くことなく、静かに待たれた態度は、大に賞讃に値するものであった。私は個人的に、待望の長き間に現われた美しい精神に謝意を表す。私は各位が間もなく一層快適なる生活を楽しめるに到ることを期待するものである。(同窓会会報第3号) (上野他七郎訳)

3. 聖路加女子専門学校第15周年

大学の前身である聖路加女子専門学校創立15周年には次のような盛大な式典と祝会が催されました。校長始め斉藤潔先生ならびに野辺地慶三先生方の御ことばが同窓会誌にありましたので、転載させて頂きました。

興健女子専門学校創立第15周年記念

我が興健女子専門学校は去る昭和2年11月22日専門学校令によって、文部省より設立の認可を受けまして

より早15年を経過致しました。顧みますれば前身たる聖路加病院附属高等看護婦学校が大正9年に創立されましてより、先生方の御努力により幾多の変遷を経つつ今日の発展に到りました事は、誠に感謝感激の至りで御座居ます。此の意義有る11月22日を選びまして創立第15周年記念式を左の順序により挙行致しました。前夜より御来校下さった遠来の同窓生も多数有り非常な盛会で一同心より、母校創立15周年を御祝ひすると同時に、母校の使命完遂に向って御奉公を誓った次第であります。(昭和17年)

11月21日(記念日前日)

午後7時 文 芸 会

11月22日

午前6時15分 国旗掲揚式及宮城遙拝

同 9時 日 曜 礼 拝

同 10時 記 念 式

同 11時 国防訓練部教練

同 12時 昼 食

午後 3時 卒業生報告

同 7時 音 楽 会

国旗掲揚式及宮城遙拝

花倉つぎゑ

午前6時15分国旗掲揚式5階、屋上に一同整列す。薄紫に紅にそして青に美しく色彩を変えて明けゆく空の美しさ、朝の清々しい冷気で一人身の緊張するを覚ゆ。やがて静寂を破って吹奏される喇叭の音、そしてスルスルと掲げられた日の丸の御旗、仰ぎ見よ翻翻としてひるがえる日章旗を、

くもりなき朝日の旗にあま照らす

神の御稜威を仰げくにたみ

厳かに朗詠せられる明治天皇御製、感激に胸がひきしめられ熱いものがぐつと込み上げてくる。この感激、日の本の民に生れこの御旗を頂き戦捷に護られて過している我等の幸、決意新なるものがお互の心に浮んだ事であらう。

この朝冷気強く手は冷く凍えていたにも拘はらず、卒業生と生徒、一つ心に火と燃えお互の心が暖かく相通ひ溶け合って感激に頬がほてり、受けし訓えの使命を強く思ひ返し、国の為、学校の為とその思いをますます強く美しく烈しく生きんの心をいよいよ固くす。

9時より礼拝 過ぎし日くる朝毎に共に祈りし礼拝堂に再び会して感謝の祈りを捧ぐることの嬉しさ。

学びの窓にて固く結べる、

睦びの鎖は解くる時なし

海山へだてて身は離るとも

心と祈は共にゆきかひ
はげみつくさまし
世になすつとめ

の歌に云ひ知れぬ感傷胸に去来するを覚ゆ。

10時より記念式、学園讃歌を歌ひつつ卒業年代順に入場、校長先生の訓話に我々使命の重大さを深く感ず。次いでこの学校の今日に至る迄に御昼力と御指導を頂いた斉藤潔先生、野辺地慶三先生の御祝辞があり、卒業生一同の宣誓、我等声高らかに宣誓す。かくて式を終り来賓父兄の方々と共にお茶、和やかに歓談のひとつ、時に11時なり。

式 辞

校長 橋本寛敏

本校が創立されましたのは22年前であります、専門学校令に依って専門学校として認可を受けたのは15年前の今日であります。

学校は創立以来其の形態に於ても教育の方針に於ても色々と変化いたしました、最近時勢の影響の下に一大変革を遂げました。学校を木にたとえれば聖路加女子専門学校と称したる古い幹は、時勢の暴風に遭って正しく倒れました。併し既に培はれ居ました根が強くありましたので、あらしの後に新しい芽が地を割って生え出て、旭日を浴びてすくすくと成長し新しい幹がやがては前にもまさる大木として繁らうとして居ます。

新しい幹とは即ち現在の興健女子専門学校であります。

今日専門学校認可15周年記念日に当りまして私共は学校の更生を祝い、更に興健女子専門学校が與えられたる新しき使命を明かに認識し、校風を振興し、新しい目的に向って勇躍前進する英気を養いたいのであります。

本校の沿革を顧みますと、専門学校の前身は大正9年9月聖路加病院に附設せられました高等看護婦学校であります。之は聖路加病院の初代院長ドクトル・トイスラーが創立したもので、ミセス・セント・ジョンがそれを助けて学校の管理と生徒の訓育に当たったのであります。木にたおえれば米国から日本へ苗木を移し植え、異国の土に根を付けるために心を砕いて培って来た時代であります。斯くすること数年昭和2年に至りまして学校の機構を改め聖路加女子専門学校に発展いたしました。此発展を助けたものはロックフェラーでありまして、校舎の建築及設備はロックフェラーの寄附によりて成り、経営補助基金及び教員の海外留学費はロックフェラー財団が支出いたしました。

其頃ロックフェラー財団は「世界人類の健康増進」

を目指して、世界の諸国に対して医学・教育・衛生・文化事業の援助をいたしたのであります、トイスラー院長を仲介として我国の政府にも呼び掛け、医学者を米国に招き研究学修を便ならしめ、又東京帝国大学図書館、公衆衛生院即ち今日の厚生省研究所、京橋にある保健館等の建築資金の寄附等を致しましたこれと前後して本校の発達に対しても援助したのであります。

斯くして完成せられました学校は設備は完全であり、経営資金も十分で、特色ある教育を施す学校として異彩を放ったのであります。然るに如何にも力の乏しい観がありました。確かに特色のある程度の高い教育を授ける学校ではありましたが煎じ詰めれば、外国より移植したる異国の花に過ぎないのであります。果してどれだけ我国の社会に貢献する実を結び得るかあやぶまれまして、其の存在の意義すら疑う者がありました。医学其他の専門学校を担当する教員は聖路加病院高級幹部、帝国大学或は文理科大学教職員の方々が兼務せられましたのでありますから専門教育は整って居ましたが、生徒の訓育及び看護学教育に直接当る教職員は皆米国人であり、学校の経営管理も亦外国人の手にありましたので、此学校の教育は世の中の動きと没交渉に行われて居る嫌がありました。之が教育の実績のあがる原因と看做されました。それ故此学校が健全なる発達を遂げ、其の存在の意義を世に認められる秋がありとせば、それは開拓者である外国人が去った後、吾等日本人自らが経営し又生徒の訓育に直接当るに至った時であって、其の日を気ながに俟たねばならぬと考えられたのであります。

然るに其の時代が期せずして早く到来いたしました。一昨年即ち皇紀2600年を祝うた年の夏でありましたが、我が国民の子女の教育は外国人の手に託してはならぬと云う輿論が勃興いたしました。本校の主事、教育主任等直接生徒の訓育に当る米国人が退職いたさねばならぬことになりました。学校創立以来20年以上の長き年月に亘って不断的努力をなして、此特色ある学校を築き上げて呉れたミセス・セント・ジョン其他の先生と袂を別つのでありますから、情に於て忍びないものがあり、名残が惜まれたのであります、時勢の変遷で斯くの如き時代に成ったのでありますから致し方がないのであります。学校が発達すれば何れは斯の如き変革が当然起るべきなのであります、それが唯あわたたしい時勢の波によって促進せられたのみであります。学校発展の新しい時代を劃するものとして此の改革が行われました。

更に昨年に入りましては学校経営財団の人事にも一変化がありました。米国は近年其富を増し繁栄するにつれて世界第一と云う自負心に迷い、東洋に於ても経

済的、政治的に東洋を征覇せんとする野望を懐き、日本の自然の発展にあらゆる妨害を加うる態度を執るに至りましたが、昨年に入っては日米の国交が漸次悪化し、ルーズベルト政府は我国を窮地に陥れんとして遂に経済断交の手段をとるに至りました。其の結果として、日本にあって永年伝道、教育等に従事して居ました米国人までも其の事業を棄てて立ち退かねばならぬ破目に陥りました。この学校を経営する財団に於て有力な地位にあった米国人、及び学校の看護学其他の技術方面の指導に當って居ました米国人教員も皆不得止帰国いたしました。斯くして学校の経営も教育もすべて私共の手に帰したのであります。

新しい特色のある学術的教育を授けるばかりでなくて、日本の魂を吹き込み、我国の現状に最も即応する教育を授ける得る教育機関、即ち我が国のために真に役立つ人材を養成するに適する教育機関として発展すべき時代が到来したのであります。ここで校名も興健女子専門学校と改めました。

新しい校名を以て更生した学校は其の最初の一年に於て早くも劃期的の発達を遂げました。其の一端を申しますと、聖路加女子専門学校の時代には卒業生に與えられた特典は看護婦免許を無試験で受けるに過ぎませんでした。興健女子専門学校本科の卒業生は其の外に中等教員無試験検定、保健婦無試験免許、産婆無試験登録の三特典が與えられることに成りました。

又本科の外に別科が設けられて、創立当時の学校のすがたが再現せられました。即ちここでは臨牀看護に専念する教養の高い看護婦を養成するのであります。又同時に家庭の主婦となり母となるべき若い女性に対して婦人が婦徳をあらわすために備うべき教養の一として尊き看護の道を教えるのであります。

斯く更生して備の成りました此専門学校は如何なる使命を担うて居るのであるでしょうか。我国は今や未曾有の大発展を遂げんとして居ります。而して大東亜戦を戦い抜くためにも、東亜に新しき平和の楽土共栄圏を確立するにも先づ第一に必要なのは強い国民であります。心身共に優れた強い国民が益々増加することを求めて居ります。之を実現せんがためには婦人の力が必要であります。其の第一線に立って而も指導の役を演ずる者が續々と養成せられねばなりません。之を實行するのが私共の第一の使命であります。

又病人をいたわり看護することは、外国に範を求むる迄もなく、我国でも昔光明皇后御自ら範を垂れさせ給いました如く女子に與えられたる尊き天職であります。拘らず近代の日本婦人はとかく之を為すことを怠り、又其の職業をもいやしめる傾向がありました。従て看護の道は益々衰え来ったのであります。然るに最近非常時に際会しまして、教育当局者の此方面に対

する認識が一新せられんとして居ますことは誠に喜ばしいのであります。此好機会に私共は正しい看護の道を汎く世に普及せしめ、同時に看護婦の職業も亦浄化向上せしめねばなりません。

又新しく開け行く大東亜共栄圏の諸地域に於て看護或は保健指導に當る女子の良き指導者、教育者も亦輩出せられねばなりません。

これ等すべては私共の興健女子専門学校の卒業生が当然担はしめらるる新しい使命であります。今日在校生徒、教職員及卒業生が茲に会いたし記念式を挙げるに當りまして、斯くの如き重大なる使命を吾々が担うものであることを深く想い、全力を挙げてその達成を期する覚悟を強固に致したいのであります。

学校が更生したる機会として3つの特典が1時に與えられましたことも、政府当局が私共の学校に期待することが如何に多いかを物語るものであります。私共一同はその期待に反かないために最善の努力をなさねばなりません。

今日御列席の父兄の方にも亦此の事情を再識せられる様御願いたしたいのであります。御子様方は今此所にも生徒として教育を受けていられますがやがて卒業して世に出れば我国の女子の先駆者として重大なる任務を遂行すべき立場に置かれるのであります。戦場に戦う男子にも等しく国のために身を捧げて御奉公の出来る能力を備える婦人となるのであります。皆様御自分だけの御子様ではないのでありまして、国家の重要な活動分子となるのでありますことを御認め願います。

卒業生の方には至る所で何れも重要な職責を負うて、国民健康強化のために努力して居られますが、殊に我国に於て新しく創められたる此困難な事業の開拓者として事業発展の推進力となって活動していられるのを見て誠に喜ばしく存じます。皆様の能力が正しく認められなくとも或又過大の期待を掛けられても困難は多いのであります。開拓者、先駆者は常に荆棘の道を行く者であります。勇気を鼓して進んで下さい。「美しく烈しく生きん」と生徒は唱って居ますが、之が吾が学校に学ぶ者、学んだ者の面目であります。皆様の働きに就ては既に諸方から良い便りを聞いていますが、今後益々健闘せられましてより大きい業績を挙げられることを期待して居ります。

今日この記念式を挙行いたしますに際しまして、これ迄本校の発達を助けられました数々の方々の名を想い出すのであります。今日殊更に感謝の意を表したく存じますのは斎藤潔博士と野辺地慶三博士の御兩人に対してであります。

本校が15年前に専門学校と成りました時に、その頃文部省の体育課長であった故北豊吉課長共に斎藤博士

は学校改革のために多大の御尽力を給ったのであります。殊に其研究科として公衆衛生看護学の教育即ち今日の保健婦養成を創めます時には其基礎を定められたのであります。而して御自身も教鞭をとられました。現在では本校の生徒が保健婦の現地実習を御依頼しています東京市特別衛生地区保健館の館長の要職にあられるのでありまして常に其の御世話になって居ります。

又野辺地博士は先きに内務省次に厚生省の技師、現在は厚生省研究所の部長の要職にあられて常に御多忙なるにも拘らず10数年来本校の教授として講義せらるるばかりでなく、教育方針の改善には常に御参加御援助下さいました。殊に此度興健女子専門学校として更生いたしますに当っては一方ならぬ御援助があったのであります。

今日此式に御二人の御臨席を得ましたことは学校一同の喜びでありまして、従来の御好意に対して学校を代表して厚く御礼申します。尚ほ今後亦学校が皇国の為、幾分なりとも、良き働が出来ます様に御援助と御指導を御願いたす次第であります。

祝 辞

齋藤 潔

今日此所に興健女子専門学校創立15周年記念式へ御招きにあずかり有難う御座います。此処に15年と云う月日が経過して此所に立って祝詞を申し上げると云う事は、私には何と申し上げようか、その言葉を知らぬ程の感慨深いものがあります。それ程此の学校に過去に於いて関係があり、又只今も関心を持っているものであります。私が大正12年の6月に始めて聖路加国際病院に参りました時は、夏の暑い日でありました。此所に病院附属の高等看護婦養成所がありました。学校の健物はその当時としては、大変立派なものであります。私には高等看護婦養成所の高等の意味が分かりませんでした。併し見ている間に確に尋常でなく高等であると云う事が分ったのであります。実は私自身も当時は看護婦教育と云う事を充分理解して居りませんでした。此の養成所に関係しているうちに段々分りかけて来ました。

我が国では、大正の中頃から昭和にかけて看護婦教育が進歩発展しかけて来ました。臨床看護婦から一歩進んだ病気を予防するとか、健康を増進すると云う、此の新しい傾向が医学の発達に連れて、看護学の中にも必要である事が、私の頭の中に浮び上って来たのを感じたのであります。私は大正14年12月に出発して、アメリカに留学しましてボストンに1年半居りました。此の1年半の間に自分の専門の研究の余暇に看護

婦教育を見たいと思って、当時ボストンにあった。シモンズカレッジを訪ねて、公衆保健看護教育とでも云うべきものに就いて見学致しました。そこで大変興味を持ちましたので見学生にしてくれと頼みよろしいとの事で二週間ばかり女の学生と共に教室で講義を聞きました。

其の後も此の教育法や卒業生の活動状況等を見て大体分った様な気がしました。そこで日本にも此の教育を植え付け様と考え、先ず看護婦教育の程度を引き上げようと即ち高等にすべきであると考えました。併し当時ではそんな事は夢の様な事であって、誰れも受け入れてくれ相にはなかった。当時ニューヨークに居られた院長トイスラーさんに手紙を書き、聖路加高等看護婦養成所を、専門学校としての認可を受けては如何かとすすめました。トイスラーさんも、むずかしい事と思うが、大賛成だからやってくれとの返事を頂きました。そこで文部省の衛生課長北豊吉博士に詳細に書き送りまして御骨折をお願いしました。幸に北博士は賛成され、且つ御心配下さるとの事でした。その事をトイスラーさんに申上げました。トイスラーさんは、大正15年6月に東京に帰りましたが、その出発の時に私への御手紙には、日本へ帰って第1の仕事は看護婦養成所を専門学校にする事であると書かれて居ります。其の手紙を私は今も保存して居ります。

トイスラー先生は東京に帰えられてから、専門学校昇格の事を文部省に交渉しまして、遂に昭和2年11月22日認可せられました。爾来15年を経て、今日の如き立派な学校に成長して参りました。此の15年間に多数の優秀な卒業生が世の中で働いて居ります。その中臨床方面には他の模範となるべき方々が、夫々の持場に在って御務に就いて居ります。

私は此所に保健衛生の方面に居る方々に就いて申し上げよう。

只今新しい保健衛生の各分野に活躍している皆様の先輩である卒業生の中で、只今私の頭に浮んで来る人々が多数にあります。公の保健指導婦の発祥である東京市の保健館には、優秀な卒業生が多数居ります。婦長の平井さんを始め名城、岩淵、渡辺、奈須、清水の大先輩が居りまして保健婦の参謀本部であります。埼玉県では農村保健婦事業の先駆者として中道さんがいられ、女学校に於ける保健衛生教育の改善の為に当時の島根県の加藤学務部長を助けて三浦さんが働いて居ります。

鹿児島県では藤田さんが女学校教育の改善と併行して、女学校卒業生から保健婦を養成する仕事に働いています。更に内地ばかりでなく最近台湾の台北に田島基子さんがいられ、台北の保健所の婦長として働いて居られます。最近の御便りに依ると風土は異っている

が、此所の新しい仕事を理解して皆さんが協力して下さるとの事であります。又一昨年(1977年)は全国保健婦の総元締としての保健婦を欲しいと厚生省から相談がありました。金子光さんが推薦されました。目下厚生省人口局の役人保健婦として重要な位置につかれています。尚保健婦指導と其の養成事業の方面には、長崎に松尾さん、茨城県に木川さん福島県に亀ヶ森さん、愛育会に小野寺さん等がいます。

本校の卒業生が時局下の国民保健事業の為め勢揃いして第一線に活躍しその職域に奉公している様子は実に偉観であります。

ここで15年の歴史と、卒業生の此れまでの国家への貢献を考えて一つ問題があります。即ち過去の榮譽に酔うてはならないと云う事であります。私自身も古い教育を受け、古い時代に育てられた者であります。今日この戦局に在って大部分の若い人々の心がまえは全く変わっています。全国民が一大躍進すべき時であります。卒業生も在校生も共に悠久3000年の光輝ある歴史を顧み、日本人を育成した伝統の精神を深く身につけて、皆さんの負うべき尊い重い任務に赴かれん事を切に望むものであります。

次に日本の保健事業の重点に就いて申し上げます。先ず第一は人口問題であります。昔は人口が多過ぎた為に産児制限と云う事を問題にしましたが、今日では人が足りなくなつて来て居ります。人口問題とは国民の数と質との問題であります。国民の質と数を良くし、日本の民族力を増進させると云う事が、今日の保健事業の重要なものであります。これを実行するには講演や、印刷物等では効果は充分ではありません。保健婦自身が国民の中に押分けて入って行き、手を取って国民の1人々々を指導する事が必要であります。

保健婦は職業としてのみでなく、家庭に入つても国民の中に混じつて国民生活の中へ保健の實際を滲透させる事が任務であります。結局国民保健の重要性を認識して、日常生活の中にこれを生かしてゆく事であります。此の仕事が保健婦に課せられているのであります。実に保健婦は国民保健向上改善の原動力であります。私は曾て此の学校の講義の際保健婦は十年後には2万人位になるだろうと申し上げましたが、今日その様な時代になっています。皆さんの先輩卒業生は全国に在って社会の先駆者として世に貢献し功績を残して働いています。

最後に一言申し上げたい事は、此の先輩の方も亦在る学生も、過去の光栄のみを追ってはいならない事であります。今後は立派な養成所が多数設立されて優秀な卒業生が他からも世の中に送り出されます。益々研鑽と修養とを積まれて、永く先駆者としての本校の榮譽を保持されん事を切望致します。

此処に15周年を迎えているいろいろの事を申し上げましたが此の様な此の好機会に生れ逢うことの光栄と、責任とを自覚され、大東亜建設の為に女性として思う存分御奉公されん事を御願ひして御祝詞と致します。

祝 詞

野辺地慶三

本日興健女子専門学校創立15周年の式典を挙げられるに当りまして御招きにあずかり御祝詞を申上げる機会を興えられましたことは私の甚だ光栄とするところであります。又唯今は橋本先生より身に余る過分の御言葉を頂きまして誠に有り難う御座います。

私は故トイスラー先生と御別懇を願つて居つた関係上聖路加病院並に本校に何か重要な問題が起つた時はよく御相談に与かつて参りました。トイスラー先生の御長逝後も引継ぎ御相談相手たる光栄に浴して今日に至つて居るのであります。その様な次第で大正12年私が初めてトイスラー先生に御近付きになつて以来20年に亘る聖路加病院並に貴校に關しての想出の数々は走馬燈の如く思い出されるのであります。今其1、2を拾つて皆様と共に追憶して見ませう。

大正12年故トイスラー先生の御仲介で米国のロックフェラー財団から本邦政府に公衆衛生技術官養成機関を寄贈する申出があつたのであります。或る事情の爲め立消えとなつたのであります。昭和5年になつてトイスラー先生の御骨折で此の交渉が再開せられたのであります。此の時トイスラー先生は本校を此の機関即ち後の公衆衛生院と、姉妹機関にしたいと云う御希望を有たれたのであります。私は当時内務省衛生局に居りまして本邦政府とロックフェラー財団との交渉並に公衆衛生院の設立計画に参与して居りましたが、トイスラー先生の御希望は至極當を得て居りますので其実現に努めたのであります。然しながら当時此の計画関係者の間には之に対して反対者が多くてトイスラー先生の折角の希望は実現出来ませんでした。然し私は本計画中に公衆衛生院の附属実習機関たる京橋の保健館には本校出身者を主力として用うることに定めまして部分的にはトイスラー氏の希望を実現したのであります。それは当時本校出身者以外には充分の教養を受けた保健婦が居らなかつたから斯く努力したのであります。

又此の時トイスラー先生は聖路加病院公衆衛生部は本校卒業生を用いて既に数年来京橋区内に於て、模範衛生事業を実施して来て居るので公衆衛生院は其の実習地区には京橋区を選定し、此の聖路加病院の模範衛生事業を継承することを希望せられたのであります。が、近代的保健事業をよく知られぬ関係者の間には、

之に対しても反対が多くて困りましたが、私は斎藤先生と力を合せましてトイスラー先生の合理的な御希望の実現に成功したのでありました。そして此の京橋実習地区の保健館が聖路加病院の隣に建てられることに定った時、トイスラー先生は其建築様式が聖路加と相応し不調和とならぬ様希望せられたのでありますが、其出来上った時はトイスラー先生は既に此の世に居られなかったのでありますけれども、私は保健館の建物は聖路加病院に比較しては甚だ御粗末ではあります但其外観は聖路加病院と均合う様に建築者に依頼して、同氏の遺志を空しくしない様に致したのでありました。

尚又昭和10年保健館が出来上って予定通り聖路加病院の模範衛生事業を愈々継承することに相成りましたところ、其主管者であったヌノーさんが之を手離すことを仲々承知しませんので、ビンステツドさん、久保先生、橋本先生等は御困りになり、止むなく会議を開き私は政府代表と言う格で、席上ヌノーさん説得を御依頼されたのでありました。此の会議ではヌノーさんは泣き出して困ったのでありますが私は諄々としてヌノーさんを説得して遂に問題を解決して上げたのであります。

又先般立教大学では本病院を中心として医学部を創設する計画を樹てられ、文部省当局も実地検査にも来られるなど、大部計画が進んだのでありましたけれども、厚生省に難色があつて中止せられました。若し此の計画が実現せられると本校は立教大学医学部附属校となるのであります。本問題に関しても私は大分立入って御相談に興りましたが、何分大問題でありますので大分御心配申し上げます。

斯の様な次第で私は本校並に聖路加病院とは大分因縁がありますので、唯今では余り講義にも参り兼ねて居りますが、本校には非常な関心を有つて居るのであります。従つて日本本校が創立15周年の盛典を迎えられ、本校出身者が日本全国否外地に迄沢山進出して重要な社会的地位を占め、職域奉公の実を興げて皇国民族の発展に寄興して居られるのを見て誠に喜に堪えない次第であります。本校は今日迄我国に於ける唯一無二の機関として非常に恵まれた地位に於いたのであります。今後官公立の同種機関が次第に出現する機運にありますので、私立たる本校は将来は今日迄の様な坦路を独占することは出来ないと思ひます。何卒本校当局に於かれましては今後益々精進せられまして本校の特色を練り、同種機関如何に進出するとも其間に意義ある存在として立ち光榮ある今日迄の声価を愈々高揚せられんことを切望して止まぬ次第であります。

(同窓会会報第12号)

4. 斎藤先生のおわかれのことば

前回の分と重複するところがあらうと考えますが、聖路加女子専門学校の創設に、Dr. Teusler はいかに熱心であられたかということ、そして、この専門学校のためにいかに多くの協力者があつたかということを示すものでございましょう。

病院を去るに臨んで

(昭和12年10月29日病院大広間に於ける送別会にて)

斎藤 潔

一言お別れの御挨拶を述べさせて戴きます。

本日は私のために、かく盛大なる送別会をお催し下さいまして、久保院長を初め、内外の先輩、同僚各位、更に恩師稲田先生、鹽田先生、並に久保教授の御臨席を辱うしましたことは、私の最も光榮とする所でありまして、深く深く感謝の意を表する次第であります。尚、只今久保院長からは、身に余るお褒めのお言葉を頂き、我が身を顧みまして、汗顔の至りに存じております。

顧みますれば、私が当病限に参りましたのは、大正12年6月12日でありますから、爾來15年の長い年月が流れております。当時私は東京帝国大学医学部小児科教室に居りました。栗山教授からのお話で、当病院のトイスラー先生、久保先生からのお申越があつて私に赴任するやうにとのこと、当病院にお厄介になることになりました。当病院に参り、木造病院の一室を与えられまして、病院に小児科を開き、同時に東京市と病院との協定事業である東京市児童相談所を病院内に創設することになったのであります。然るに3ヶ月後の9月1日には、彼の関東大震災に遭遇致しまして、病院は一瞬にして焼失致しました。私は当時病院の一室に居りましたが、幸に怪我もせず、入院患者の処置を終つてから既橋近くの我が家へ帰りました。我が家は既に火焰に包まれ近寄ることも出来ず、遂に何物をも残さず焼失致しました。其後の病院の様子を申しますと、青山学院の木造寄宿舎を借り受け、東京市と協力して、当時市内に悩んでいた多数の病傷者の診療に従事致しました。

其後時経て、只今この新館の建てております辺に、米国から寄贈せられました天幕で天幕病院を急造し、全職員がやはり罹災病傷者の診療に従つたのであります。其後大正15年には、第一次木造仮病院が、再び焼失致しまして、今日外来並に寄宿舎其他に使用してお

ります只今の旧館が出来上ったのであります。

次で新館建築の準備に着手し、数年の歳月を費しまして、只今のこの新館が設計、建設せられたのであります。即ち現在の木造とコンクリート建築との混合病院時代となったのであります。この間12、3年を要したのでありますが、満目凡てこれ灰の焼野原の中から只今おりますこの大殿堂が十字架を頂いて、高く空に聳え、立ち上ったのであります。

この間に於きましての、トイスラー院長久保副院長初め内外の関係者の、一方ならぬ御苦心と御奮闘と、病院への多数の同情者の厚き御助力とを私は就任間も無くから只今まで、具さに見たり聞いたり致しました。特に、私は病院と外部との間の用事を委托せられたので、トイスラー先生には絶えず近く接する機会が多かったので、其間の経過、事情、困難等をも直接窺ひ知ることが出来まして、只今でも様々の事柄を思い浮べて、今日までの多事多難なりし経過を迎えることが出来るのであります。トイスラー先生の色々な場合のポーズを胸に画がき出し、先生の性格の凡ゆる現われを思出だすのであります。先生の面影は決して私の頭から去らないのであります。

又先生の熱望しておられたものの一つとして、病院附近一帯を美しい地区としたいということのために御苦心せられましたことが、今日まで徐々ではあります著々と実現しつつあるのであります。

即ち新病院の南西端の木造家屋は買収せられ、或は一部東京市より無償で借地するの恩恵に預ったのであります。このためには、私は先生と共に不動産登記のため裁判所の法廷に立ったこともあります。又旧館の南隣には東京市所有の空地がありまして、ここに倉庫が建てらるる計画がありましたが、東京市に願出でてここへ東京市明石町市民館の建設を見たのであります。更に其隣地数百坪には、東京市に願出でて東京市保健館の敷地となし只今其の建設を見つつあるのであります。又旧館東隣は東京市の道路であります、東京市は震災後道路幅員が広過ぎるので両側を買却する計画を建てました。私は之れを聞いて先生に御相談致しました所、先生は其処へ是非緑樹帯(プルヴァー)の建設を熱望致しました。この望みは幾変遷を経て遂にビンステッド総長の時に致りまして実行計画が進み、ごらんの通り只今東京市の手によって建造中でありまして、聞き及ぶ所に依りますと、最も日本式のもので、東京に類のない緑樹帯が出来上るようであります。この緑樹帯は病院の入院患者、職員等の病院関係者を朝な夕なに染ましめるのみでなく、又京橋区民、東京市民に美観と保健との上から利益を受けて、更に東京名所の一つともなりうるのであります。又この緑樹帯に就いてトイスラー先生のお喜びになりましたこと

は、東京市が聖路加国際病院の存在を重要視し、且つその多年の市民への貢献を認めた実物証拠をここに永久に残したこととなるということでありまして、内外の病院への同情者が、病院を訪問してこの緑樹帯に立ったならば、東京市が病院に寄せられた厚意を目の当り見て如何なる感に打たれるでありましょうか。私は皆様、やがて完成せられます緑樹帯の中に歩をお進めになりまして、一木、一草を見るにつけても、トイスラー先生の高く、遠い、且つ大きな志をお偲び下さることを切にお願い致しますのであります。

病院の基礎既に定まり、完成に間近く、卒然としてトイスラー先生の計に遭遇致しました。

先生の偉大なる崇高なる御性格を想起し、懐古して、私の病院10数年間朝夕に受けました先生よりの印象は、永く永く私の胸奥を去らないのであります。

先生の御逝去後、第一の仕事は、先生失き後のこの大病院を如何にして運営するかの問題でありました。病院当局者のお考は期せずして、財団法人として、日本の法に依って認められ、法に従って動くということでありました。

私もこの計画を聞きまして、微力を尽し、幸に比較的早くその成立を見たのであります。

今や聖路加国際病院は、揺ぎなき磐石の上に建って神の栄光と人類の福祉とに貢献しつつあるのであります。

先生の病院を通じての主義と理想は、(1)最新の大病院を建設して病院管理の模範とすること、(2)病苦と貧苦に悩む多数の市民を救済すること、(3)内外人を診療して国際病院の実を挙げる、(4)米国医学を紹介し、日米医学の交換に資すること、(5)看護婦教育の向上、(6)病院の為しうる予防医学、公衆衛生事業の実験、(7)医学を通じての日米親善等でありました。先生の御事業は、此の理想の実現に向って、着々と難関を突破せられたのであります、この中私の病院生活中に関係致しました2、3の仕事に就いて申述べたいのであります。只今久保院長からもお話がありました様に、病院は震災後間も無く東京市の産院、乳児院建設計画に協力して、病院敷地の一部を提供し、東京市築地産院同附属乳児院の創立となったのであります。同院の医務の凡ては、病院で引受けることの協定が東京市と成立しまして、今日に及んでおります。

大正の末期頃文部省は、学校看護婦制度を本邦に布かんとし、其試みとして2、3名の特志看護婦を得たいとの希望を私まで洩らされたのであります。病院からは、特にこの方面に理解ある看護婦を2名文部省に派遣し、文部省の意図に依って、本事業の試験時代が始められたのであります。爾來変遷を重ねましたが、文部省の御努力に依って只今では3,000余名の学校看護

護婦が全国の学校に働いておるのであります。又文部省は各科専門の総合学校診療所の創設を計画し、本病院にその開始を勧められたのであります。大正14年末よりこの事業は始められまして、今日に及んでおります。是等文部省との経過の間に於て、聖路加女子専門学校が、高等看護婦養成所以来、文部省の御援助によって大いに其の面目を改め、且つそのためにロックフェラー財団からも多大の御援助を得るに至りましたことは、深く文部省の御厚志に感謝せねばならないのであります。

私は之等の諸事業を担当することに依って、多大の貴き経験を得させて頂きました。

大正14年には、先生の御助力に依りまして、ロックフェラー財団の留学生として、米国ハーヴァード大学並に歐洲諸國で研究する機会を興えられました。深く先生の御厚意を重ねてお礼申上げる次第であります。

尚此際私の厚くお礼を申し上げなければなりませんのは、私の留学中私の家庭に起こりました不幸に際しまして、病院の各位から多大の御配慮と、御援助とを得ましたことであります。私の永く忘れられないことであります。

次には聖路加女子専門学校のことであります。

私が本病院に参りました時は、聖路加高等看護婦養成所と申しておりました。病院で働いておりました間に、この養成所の組織、科程等を研究致しまして、感心したのであります。翻って本邦看護婦教育の現状を觀て、其の改善の急務なることを痛感しておったのであります。

私は留学中、米国の看護婦教育を調査、研究する機会を得まして、我が聖路加看護婦養成所を、専門学校令に依る本邦最初の専門学校たらしめたいという希望を以て、当時ニューヨークに來られました先生にお話致しました所、先生は非常にお喜びになりまして、御賛成下さいました。そこで私は米国から文部省学校衛生課長北博士に、この希望を述べ、御賛助に依ってその実現に努力致したのであります。北博士の多大なる御助力に依りまして、その可能性がほのかに見えたのであります。私は未だニューヨークに居られた先生にお知らせ致しました所、先生も大いに喜びになりました。其後東京に帰院のためニューヨークをお立ちになりました時に、ボストンに在った私への、先生よりの大正15年4月30日附お手紙の一節には次のような文句がありました。

I plan leaving the latter part of May or early June and of course one of my first duties on returning to Tokyo, will be to take up with Dr. Kita the extention of our plan. I am much impressed with his suggestion that we change the standing of our

school for nurses to a college grade, and anything I can do from this end, will be gradly done.

其後専門学校への昇格は、文部省の特別の御援助と学校当局の御骨折とによりまして、遂に其の実現を見たのであります。昭和2年3月25日附、東京の病院に居られた先生から、ボストンに在った私へのお手紙の一節には、次のようなことが書かれてありました。

…… Dr. Kita's interest continues unabated, in the welfare of our school, and almost surely before your return to Japan we will have received our license as a Semmon Gakko. It is a satisfaction to think we will have the honor of founding the first school of the kind in Japan.

其後学校の組織、科程も改善せられ、且つ当時日本最初の公衆衛生看護学科も、研究科として創設せられたのであります。

私の記憶の糸を引出しますと、限りも無いことでありますから、此辺で昔話は切上げたいと存じますが、次に私のこれから従事致します仕事に就いて一言申し上げまして、皆様の御理解と御後援とをお願い致したいのであります。

先程久保院長から、私が保健館に就任することをお話になりましたが、保健館とは何物かとお尋ねもあるようでありますから簡単に御説明申し上げます。

既に指折り数えますと古い事ではありますが、今より8年前の昭和5年8月、ロックフェラー財団のドクトル・グラントが東京を訪問せられました。一日同氏はトイスラー先生をお自宅に訪問せられ、日本の医学、衛生問題を論議せられましたが、その中にこんな会話がしたのであります。ト先生『君も度々日本に來て、日本の衛生状態も相当調査したであろう。もうこころで何か実行に入っては如何か』。グラント氏『實際事業とはどんな仕事か』。ト先生『勿論以前に話のあった公衆衛生院建設問題さ』。グラント氏『此問題は、ロックフェラー財団では、日本の医学界に異論があるとのことで、今日まで立消えになっているのだ』ト先生『いや、その異論は今日では凡て解消して、自分の觀察では、日本の医学界も、一般社会も其の実現を驕望していると思う』グラント氏『ああそうですか』。

かくして、先生は先ず長與又郎教授を通じて、日本政府とロ氏財団とを結び、昭和5年11月2日内務大臣官邸に於て安達内務大臣とロ氏財団代表者との第一次会見となりました。私も先生と共にこの会見に加わりましたが、其の後多難なりし経過を経て、満7年後の今日公衆衛生院は完成に近ずき、日本政府は既に準備費の予算を得て、明年1月から之れが開始の運となったのであります。

この公衆衛生院は、内務省の管理するものでありま

して、本邦衛生技術者を養成し、現在の技術者に補修教育を施し、且つ衛生学者の研究場たらしめ、併せて日本の衛生学を研究する所であります。衛生学の研究並に技術者の養成には、実習場が必要であります。恰も医学教育に附属病院が必要であるのと同様であります。

保健館は公衆衛生院の実習場であります。内務省は東京市をして、保健館を設立せしめたのであります。

去る8月以来政府から、私に対して保健館長就任方を懇請したのであります。其後種々内務省と懇談の結果、保健館長と公衆衛生院教授とを兼ねる約束で、先ず保健館長に就任したのであります。其間に於ての久保院長の御親切なる御言葉を今も尚忘れず、永く記憶して感謝しております。

尚終りに一言稲田先生にお礼を申し上げ、且つかかる機会をお与え下さいました病院にも感謝の意を表したいのであります。私は数年来、日本の小児の衛生の基礎科学的研究と、更にそれから出発した実地応用の研究を行う研究所の必要を認め、それが計画を樹て、機会の至るを待ったのであります。昭和9年2月皇太子殿下御降誕記念として、御下賜金がございました。この御下賜金を基礎として、恩賜財団愛育会が創設せられました。私はこの会の調査委員を囑託せられましたので、好機至れりとして、本会の主催者に研究所建設のお話を致しました所幸に御賛意は得たのであります。資金を得るのに窮したのであります。

私はこの計画を稲田先生にお話致しました所、幸に先生の御賛意を得、且つ先生には早速三井家へお願いして、遂に研究所建築費として40万円という多額の御寄附を得たのであります。この研究所は只今麻布森岡町の宮内省の土地を頂きまして、建築工事中でありまして、来年6月には竣工の予定であります。

私は只今この諸準備を依頼せられ、折角手順をすず

めております。先ず私のこれからやってゆきます仕事は、以上申し上げましたような範囲でありまして、何分にも之等は本邦医学界に全く新しい事業のみであります。私はこの大任を果たし得るかどうか、疑っている次第であります。この仕事をお引受けするに当りましては、恩師先輩各位にも御相談申し上げました。この仕事に初めから御関係のありました東大総長長與先生からは、特に今後私の仕事をやってゆく上の心構えに就いて御親切なる御訓辞を頂きました。その中でも殊に御強調下さいましたことは、この事業は日本最初の仕事であって全国は勿論、世界の眼が本事業の上に注がれているのであるから、本邦医学界、衛生行政界全分野からの協力を得ることであります。

このためには公平無私であることと、日本独特の日本の国情に適する公衆衛生院、保健館を建設すべきであるという御主旨のように承っております。私はこの御教えを守って努力してゆきたいと心懸けております。

幸に多年御交誼を頂きました総長、院長、先輩、同僚各位並に恩師諸先生に於かせられましたは、今後共相変らず御指導、御援助をお願い致し度いのであります。

本日は真にありがとうございます。

(同窓会会報第7号)

5. ミス・ホワイトのことは

Miss. S.G. White は昭和28年に橋本寛敏院長の要請で来日され聖路加女子専門学校の校長に就任されました。これは、先生が行なわれた卒業生への“ことば”でございます。この中に聖路加女子専門学校のおいたらとそのあゆみが述べられると同時に卒業生への期待も伝えられております。それから8年目に短大は大学として認可されたのであります。

Commencement address

to the Graduating Class, with a few additions for the Alumnae Annual Bulletin
March 27, 1956

Today you are passing third and last milestone of your basic preparation for Nursing. First, when you came to our temporary educational unit across the street in March, 1953, after your physical and other examinations had been given you, and looked eagerly, and perhaps anxiously, at the posted results. You found your names as accepted applicants out of 67 who took our examination, you 22 were all we had room for because our large Ed. unit, as well as the hospital and barrack building were all occupied by the U.S. Army. Second, when you

completed the preliminary period in the school and received your caps and lit candles from the hands of two members of your nursing faculty and marched from the chapel in their light according to the traditional capping ceremony. May you ever be mindful of the light you as a nurse can bring to people with aching bodies, disturbed minds and weary hearts.

Now, today, those student days are finished. Yet, this is your commencement or beginning. Your future in before you and prominently in it is your nursing career.

My mind now goes back to another historical beginning—that of the Semmon Gakko from which you are graduating. Its beginning is not as easily dated as the idea was planted and germinated over a period of several years in the minds of our founder, Dr. Rudolf Bolling Teusler, and his close associates, here in Japan and in the States.

In the early nineteen and twenties numbers of young Japanese doctors were being sent abroad to study methods in implementing Public Health programs and others to observe the Administration of related Hospital programs. Many of these went under Rockefeller Foundation Fellowships. Dr. Teusler served on a Committee appointed to approve such candidates. Also, on this Committee was Dr. Tokutaro Kubo, chief assistant of Dr. Teusler for 25 years and continued so until Dr. Teusler's death in 1934 after which he succeeded him until his own death in 1941. Here they had a close relationship with government officials, university medical school presidents, hospital administrators etc. This Committee soon realized that for the work of these men to be effective on their return to Japan, a generally better trained nurse including training in public health nursing would be needed.

St. Luke's School of Nursing had just been reorganized under Mrs. Alice St. John's leadership. Its requirements for admission had been raised to include graduation from high school, unknown in nursing schools up to that time. Its curriculum had been revised to meet those standards generally accepted as good in the more advanced countries in nursing education. Miss Iyo Araki who had been the chief superintendent of the nursing service in the hospital as well as in charge of the first School established in 1904, remained as superintendent of Nursing Service until her marriage to Dr. Kubo in 1934. And Mrs. St. John continued in charge of the School.

This learned Fellowship Committee scrutinized the new School with interest and suggested that it be used as training center for a new type of nurse now needed. Dr. Toyokichi Kita, the chief of the Department of Hygiene of the Mombusho, and a member of the Committee, was particularly interested because of his responsibility for the health of the students of the public schools. After much thought and consideration he suggested that St. Luke's School again be remodeled to include training in Public Health Nursing and to meet the standards of the Mombusho as a Semmon Gakko. Thus the seed was planted which, in maturing, led to the establishment of the St. Luke's College of Nursing. The first such recognition to be given to nursing in Japan and remained the only such recognized school until 19 years later, 1946.

Only a short time before, the great earth quake of 1923 had left St. Luke's and much of Tokyo, in ashes and our Bishop Mckim and cabled to America "All lost but Faith in God." St. Luke's went forward in that Faith. New buildings were already being planned. They were changed to provide a larger and more comprehensive school unit. To some people Dr. Teusler's dreams seemed to have gone "too far." He was a dreamer but not an idle one. He was also an optimist and an untiring worker with the ability of inspiring others to go along with him.

Establishing such a school meant much work by all concerned. Money was needed—much of it. A qualified faculty had to be found, several of which, one to be Dean, Mrs. St. John, and instructors for the present school, were already here, having come from the States to help in the reorganization of 1920; others were enroute but more, both Japanese and American, were needed and the idea about establishing a Semmon Gakko had to be "sold" to friends on both sides of the Pacific. Dr. Teusler accepted the challenge and set himself to the task before him.

I am sure he and his staff, under Dr. Kubo's and Mrs. St. John's leadership, must have become discouraged many times but they were not ones to show such nor to allow discouragements to linger in their minds.

Probably his hardest task was selling "the idea" of making others believe in it enough to give aid. He almost became a commuter back and forth across the Pacific in accomplishing the job but he accomplished it.

Among our greatest contributors and most valuable advisors was the Rockefeller Foundation which was at that time, and still is, giving such help for health programs all over the world. Numbers of Japanese nurses, doctors, nutritionists etc. were started abroad for advanced study which could not be obtained here. These came back to supervise areas in the hospital, in the public health division and as faculty members. In June, 1927 a tentative approval was given for the Semmon Gakko and in November full approval came. Dr. Teusler was elected Gakko Cho, although he earnestly desired this position could have been filled by a nurse but realized the time was not ripe for this.

No one hesitated long from their labors to celebrate. Many problems were still before them, as continued advancement and strengthening of the new structure was their desire and has continued to be down through the years. Unfortunately, Dr. Teusler's death came shorsly after the new buildings were completed but is his spirit the work went on under the leadership of Dr. Kubo.

In addition to the three year Semmon Gakko, a one year Postgraduate Course in Public Health Nursing was started in 1930. accepting for admission graduates from other nursing schools an well as St. Luke's. Dr. Kiyoshi Saito was chosen administrator, Miss Christine Nuno in charge of P. H. Nursing, Dr. Sadakata and Elliott in charge of the Child Welfare Clinics, working with them was an adequate faculty. In 1935 this Publdc Health Course was made a part of the Semmon Gakko under a four year program. Also conrses in midwifery and teaching and supervision in School of Nursing were added. Those entering the College after 1935 were required to take three months in Public Health Nursing during the 4th year and after that could choose one of the above specialities for the remainder of the year after which they received their College Diploma for the 4 year course.

The next major change came a few years later when the Foreign staff evacuated in later 1941 and the College and the Hospital were turned over to the Japanese for administration and to be theirs. Such is the aim of most missions, that all projects will be turned over to the people of the country they serve, as soon as they are prepared to accept them. The Japanese of both institutions under Dr. Hashimoto's lealership and, who had previously succeeded Dr. kubo accepted the challenge in the same spirit as they did with Dr. Teusler in the beginning years. They have proven, without question, their abilities to carry on and are more cognizant of their countries needs.

When I returned to Japan in 1948 on the invitation of College Administration I found shocking changes with the Hospital housed in the very small rented building, you know so well-both units of the medical center having been deprived of their own buildings under the Occupation. The spirit, courage, aims and the ideals and work of the personnel, however, remained the same.

The College by that time was functioning together with that of the Japanese Red Cross Society where they remained for seven years. Both schools together were going forward. We are grateful to our Red Cross friends and will ever be. During this time the 4th year was dropped as a new law governing P. H. made it Post Graduate Course.

Returning to the barrack building in 1953 was helpful but gave us little opportunity to realize our original purpose.

Young graduates, as you and your friends here in to this building here today you no doubt observed the Hospital and College Unit occupied by the U. S. Army are practically empty. Although we can hardly believe it, it is being made ready for return to us within a few months, after eleven long years.

I have been talking about your school The Sei Ruka Joshi Semmon Gakko, It did not die. It never has failed to go forward, though officially it ceases, as such at the end of this school year, and under the present education law, it gives way to a similar school, the Sei Ruka Tanki Daigaku, established in 1954 from which its first class will graduate next year.

For twenty-nine years the Semmon Gakko laid a strong foundation and built a structure which will remain a part of any school which may follow it in the future. Other changes will come as new methods and systems arise and are accepted, and as new community and national needs in regard to health and sickness are

indicated.

As you leave the College today remember that it can be deemed good, only, if its product is good. You are this year's product. Be good nurses in which ever of the several fields of nursing you may choose. Do not let your ideals of service falter nor your technics lapse nor your minds grow stale. Keep alert for new technics and new knowledge. Be good citizens. We would not wish that all of you devote your entire life to your career but we do hope that you will give several years in its service. Your country needs you.

As you go forth we, your faculty, will follow you in our thoughts and prayers. May God bless you all richly.

Sarah G. White

Gaku Cho (since August 1948)

P.S. This year of 1956 is an eventful one for me. Before it closes I will reach the age of 65 years; will complete 41 years in nursing; 16 in the U. S. A. 18 in Japan (10 prewar and 8 post war) ,7 years in Puerto Rico; and will return to the States before another cold season on terminal furlough and finally retiremest.

6. 大学設立に寄せて故橋本院長の言葉

日本病院協会々報の昭和39年4月15日114号に掲載されました故橋本寛敏前学長の特別寄稿から抜粋させて頂きました。

“聖路加病院看護大学設立について”

聖ルカ看護大学が本年1月25日に認可された、国の将来を憂えて、看護教育の本質を向上させるために大学の名乗りをあげたのはこの学校が始めてだと思う。看護教育の程度を上げることは病院の経済負担を重くするし、看護婦が生意気になつて御し難くなるから不都合だといって、教育程度上昇を白眼視する人々が医者の中にいる。しかし日本の乱れた現状を見ればみる程、これまで看護を軽視して、それに従事するものの養成に力を入れなかつた報いが今現われたと思う。病院医療の重要な機能の一つである看護を本然の姿に育てあげない限り、日本の病院もまた存在の意義ある病院として存在し得ない。それには看護婦養成教育、病院看護実務の企画指導に当るだけの力のある人材が数多く必要であり、そのような指導者を育成するのに先ず力を入れなければならないことと痛感する。

本腰を入れて正しい教育をすといつても、すべての看護婦を高い教育訓練を授けたものだけにするというのではない。実務看護婦は廃止せよというのではない。低い程度の教育をすとしても、その教育を効果的にし、卒業後には、その指揮指導を良くしなければならぬのである。その上に立つ正規の看護婦の力もこれまでよりも強くしなければならないし、更に主任看護婦の特殊教育訓練も実行しなければならない。そうすればこのような難しい仕事を実際になし遂げることのできる才能を豊かに備える指導者を輩出させるために特別に力を注がなければならない。それには、この企画に適應するような素質のある人材を入学させ、精鋭主義の高級教育を施し卒業後もまた引き続き指導者としての教育訓練を行わなければならない。それを

実行するのが看護大学である。こんな看護大学を企てるならば、第1はその教育内容を正しく定めなければならないし、第2には指導となるに適する人材を数多くの若い女性のうちから選抜しなければならない。それが果して可能であるかが問題である。此度聖ルカ看護大学が名乗りをあげたのは、この2つの点について自信があるからである。

7. 日野原学長の言葉

昭和53年1月10日の学園ニュース(58号)から“新しい看護教育を目指して”という標題で大学創立15周年をふまえて大学教育のめざすものを日野原 重明学長は次のように述べていらっしゃいます。

| 年頭に当って |



新しい看護教育を
目指して
学長 日野原 重明

聖路加看護大学が発足して、今年は15年目ということになる。日本の立遅れた看護教育を早く高めようとして、ルドルフ・トイスラー先生が、聖ルカ病院を中心に看護教育を20世紀の冒頭から築地で始められた。これは、セント・ジョン女史の御努力で発展、橋本寛敏院長兼学長の熱心な陣頭指揮により遂に昭和39年に、本学が4年制として誕生したのである。

大学として発足したからには、私等の大学は日本の看護教育に大きな責任があるのである。私は看護婦のレベルや役割にはいろいろあってよいのであって、看護を目指すものが、めいめいの能力、使命感、機会を十分に発揮できるような教育体制が日本に打ち立てられなければならない、と思っている。

より高い、より知的な、より技術的な専門職の領域

で働いたら、また、教育者となったら、また、今までは余りなかった看護の科学の研究者となったら、方々のために、勉強の機会が与えられるような教育体制の樹立が望ましいのである。

本学は、一昨年から、看護短大の卒業生に、さらに上級の勉強のできる課程を設置して、編入クラスを開いたが、このようなことが、他の四年制大学にもなされることを、私は強く希望するものである。

厚生省管轄の高等看護学院出身の方々のためにも、更に大学への進学が可能となる途も将来考えられなければならない。高等看護学院のコースにはいった人は、いつまでも大学に編入出来ないとすると、それは狭い教育の門といわざるを得ない。

アメリカでは、このようなことをさせるルートをセカンドステップと呼び、病院附属の看護学校出身者のために、大学コースへの編入がはかられており、その意味で、アメリカの看護大学は、勉強したい人のために門戸を広く開いているといえよう。

さて、新しい年になって、私たちの大学の教員や、同窓生がこぞって願うことは、日本の看護を早く世界的なレベルにするために必要な専門的人材をつくる看

護の大学院造りである。これには人的、並びに物質資源が充足されなければならない、このための非常な努力を私たちはこの一年間続けていかなければならないのである。

看護のメッカは「聖ルカ」だと、聖ルカ病院に入院した患者やその家族または、看護教育畑の方々が考えているその期待に、応えて私たちの看護大学はここに新しい軌道にのるべく、ロケットを噴出して前進しなければならぬと思う。

教職員も学生も同窓生も一体となって、私たちの大学を前進させよう、こう私は年頭にあたり叫びたい気持ちである。

—○—○—○—○—

おわりに

過去60有余年におよぶ本学のあるいてきた足跡を探ってみると、その発展を支援した多くの人びとがおられます。

掲載させていただきました資料は少ないのですが、本学を愛してやまない先覚者の声としてお読り頂ければ幸いです。

St. Luke's College of Nursing

(Sei Ruka Kango Daigaku)
— The History of the Progress—No 2

Aya Maeda

The Sei Ruka Kango Daigaku has made the remarkable progress during the past 60 years. It was established as St. Luke's Hospital School of Nursing by Dr. R. B. Teusler, founder of St. Luke's Hospital. This School of Nursing was accredited as the Senmon Gakko by Monbusho in 1927. It was the only one higher Educational Institution of Nursing Education until the end of the Second World War in Japan.

The Senmon Gakko had to meet the New Education Law by the year of 1954. Our Senmon Gakko did not have the conditions to meet the requirement of the establishing the New 4 year Daigaku. So it was reorganized as Tanki Daigaku.

10 years later it was reorganized again as the 4 year Daigaku. It was 1964. In 1980 Daigakuin—Master Degree Course in Nursing was established.

One big ceremony was held for the 15 th Anniversary of Senmon Gakko in 1942. And the other one was in 1970 to celebrate its 50 th anniversary. 1979 is the 5 th anniversary of the Sei Ruka Kango Daigaku. It authorized in March, 1964.

I have reprinted some articles as the information for the readers to understand the process of the progress and the significance of the school.